

鳥取県の漁業

—水産基地境港を中心として—

2 回生 朝長颯

1. はじめに

2021 年現在、日本の水産業は従事者の高齢化や水産資源の減少、国内市場の縮小などに悩まされ、衰退の一途をたどっている。しかし、狭小な国土面積や病虫害の多い環境に悩まされる農業と異なり、水産業には世界第 6 位の広大な排他的経済水域という恵まれた自然環境がある。自然環境の面で考えれば、日本は水産業に有利な国であるといえるだろう。食料自給の重要性が叫ばれる昨今、この問題を解決するには比較的環境に恵まれている水産業を振興することが特に重要だと筆者は考えている。

今回、調査対象とした鳥取県は全国トップクラスのズワイガニ水揚げ量を誇っており、松葉ガニとして全国的にも知名度が高い。また、ズワイガニ以外にもブリやクロマグロなど他の水産物も多く水揚げされており、漁業の衰退が進む日本において、依然として漁業が盛んな地域となっている。本稿では鳥取県の中で、県漁獲量の約 90%を占める境港市を中心に調査を行い、その特色と実態を明らかにする中で、鳥取県の漁業が盛んな要因について考察する。

2. 鳥取県の漁業

1) 全国との比較

まずは鳥取県の特徴を探るために、全国との比較を行う。次ページの図 1 より、都道府県別の海面漁業漁獲量をみると、漁獲量が多いのは主に太平洋側の地域であり、日本海側の地域は漁獲量が少ないことが分かる。上位 5 県をみても、1 位北海道、2 位茨城県、3 位長崎県、4 位宮城県、5 位静岡県となっており、太平洋側の県が多いことが分かる。しかし、鳥取県は日本海側にありながらも、太平洋側の漁獲量の多い地域と同程度の漁獲量であり、順位も全国第 10 位となっている。全国的にみても鳥取県は漁獲量の多い地域といえる。

次に図 2 より、全国の漁業従事者数を比較すると、これも日本海側より太平洋側が多いという傾向がみてとれる。上位 5 県は 1 位北海道、2 位長崎県、3 位青森県、4 位岩手県、5 位宮城県となっており、漁獲量でも上位に入っている県が多い。しかし、鳥取県は漁獲量が多いにも関わらず、太平洋側はもちろん日本海側の他地域と比較しても、漁業従事者数が少なくなっている。全国順位は内陸県を除いた 39 都道府県中 33 位である。鳥取県は全国的にみても漁業従事者数が少ない県だということが分かる。以上のことから、鳥取県は漁獲量に対して漁業従事者数が少ないという特徴を持っていることが分かった。

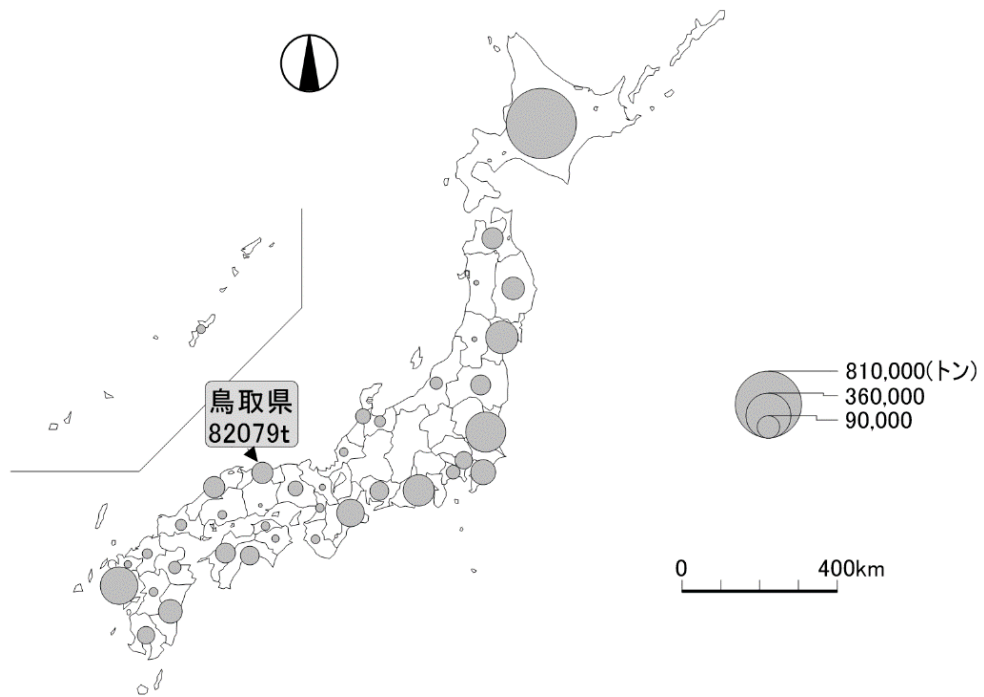


図1 都道府県別海面漁業漁獲量（2019年）
（海面漁業生産統計調査より作成）

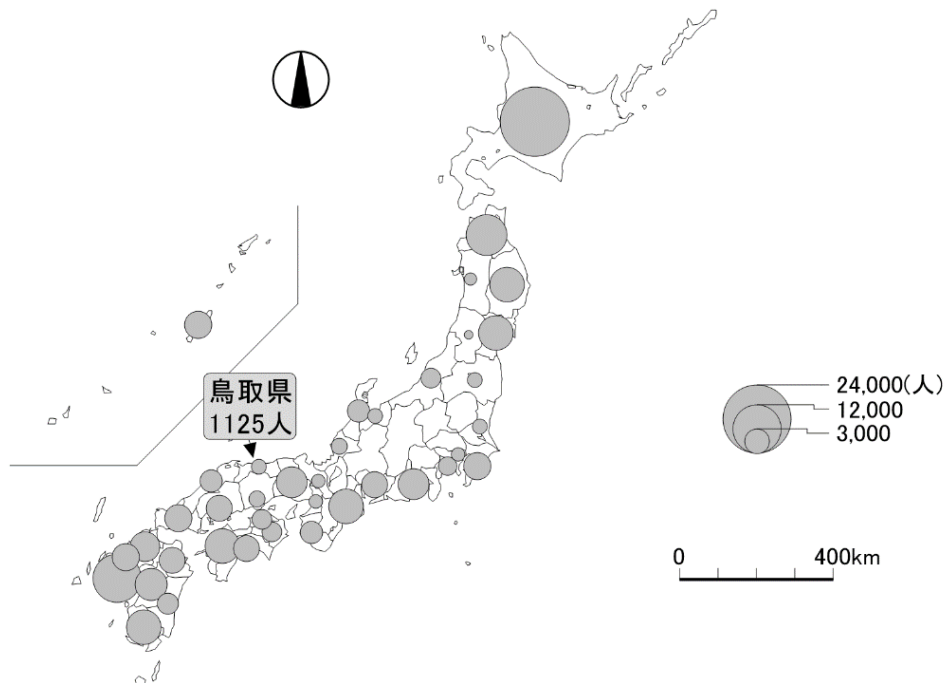


図2 都道府県別海面漁業従事者数（2019年）
（海面漁業生産統計調査より作成）

表 1 鳥取県魚種別漁獲量上位 8 品目 (2019 年)

魚種	漁獲量(t)	割合(%)
いわし類	30034	36.6
さば類	15521	18.9
かつお	9223	11.2
ぶり類	6898	8.4
あじ類	3670	4.5
まぐろ類	3666	4.5
かに類	2878	3.5
いか類	2637	3.2
その他	7552	9.1
総漁獲量	82079	99.9

(海面漁業生産統計調査より作成)

表 2 鳥取県魚種別産出額上位 8 品目 (2019 年)

魚種	産出額(億円)	割合(%)
かに類	33	16.5
ぶり類	21	10.5
いわし類	20	10.0
まぐろ類	19	9.5
いか類	17	8.5
あじ類	17	8.5
さば類	15	7.5
かつお	14	7.0
その他	44	22.0
総産出額	200	100

(海面漁業生産統計調査より作成)

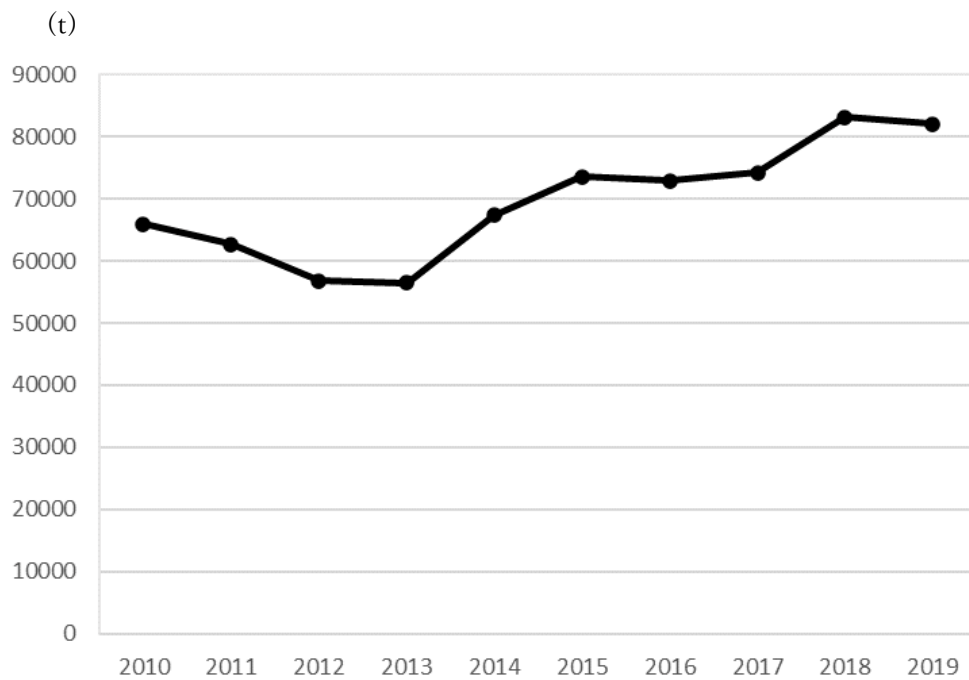


図3 鳥取県海面漁業漁獲量の推移
(海面漁業生産統計調査より作成)

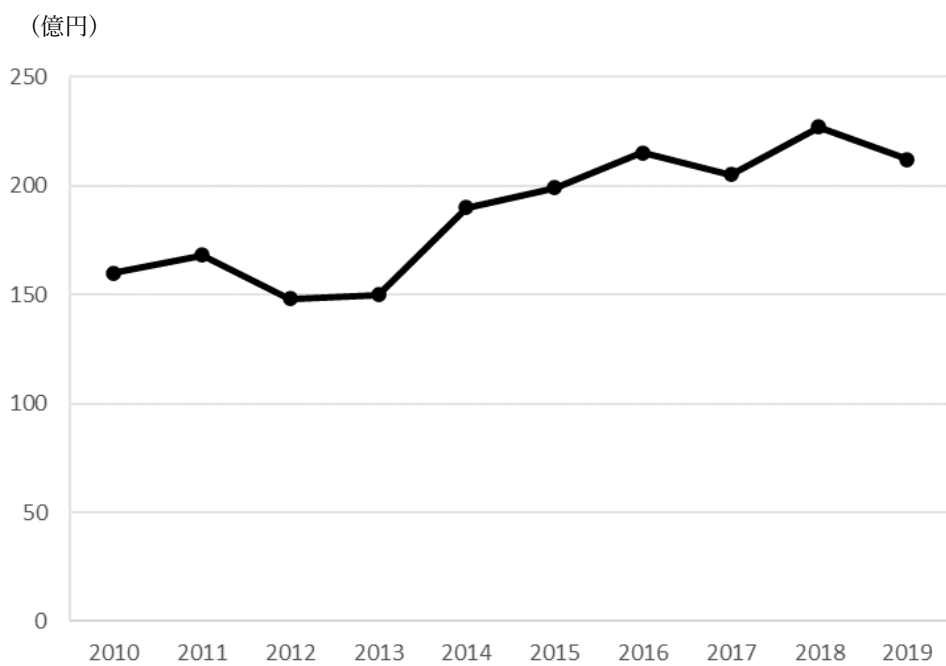


図4 鳥取県海面漁業産出額の推移
(海面漁業生産統計調査より作成)

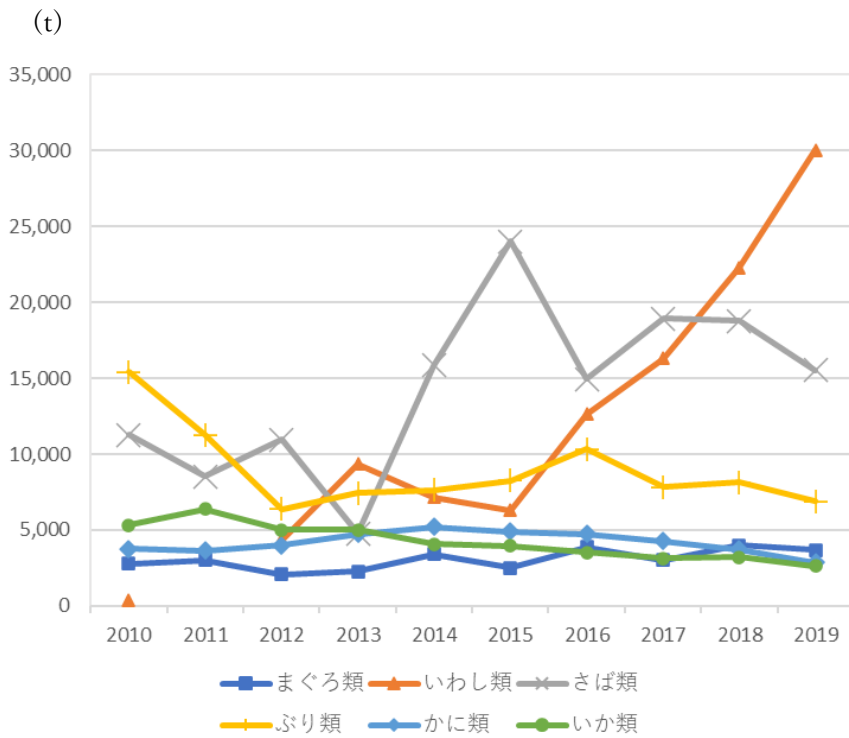


図5 鳥取県魚種別漁獲量の推移
(海面漁業生産統計調査より作成)

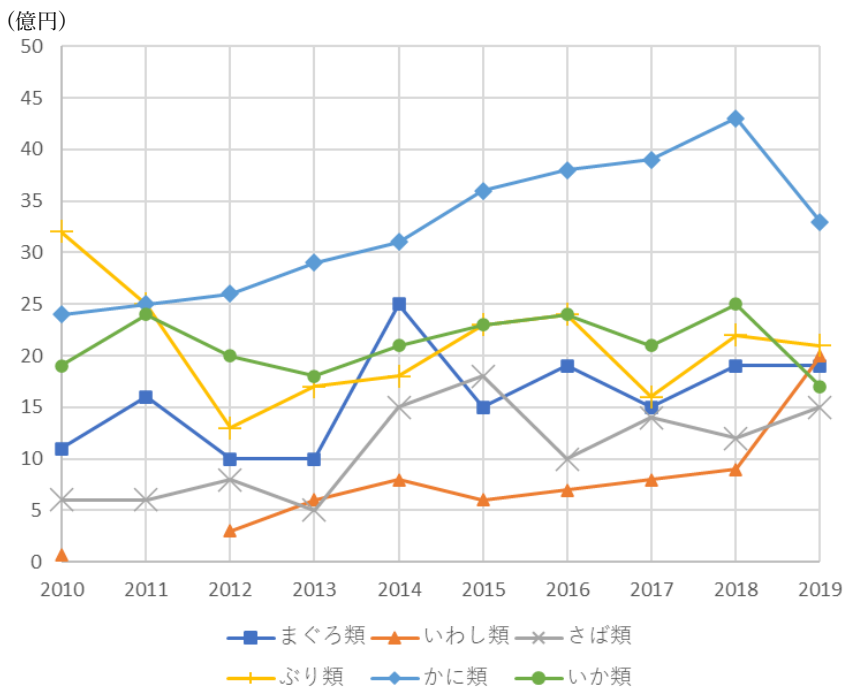


図6 鳥取県魚種別産出額の推移
(海面漁業生産統計調査より作成)

※図5、図6ともにその他の品目を省略

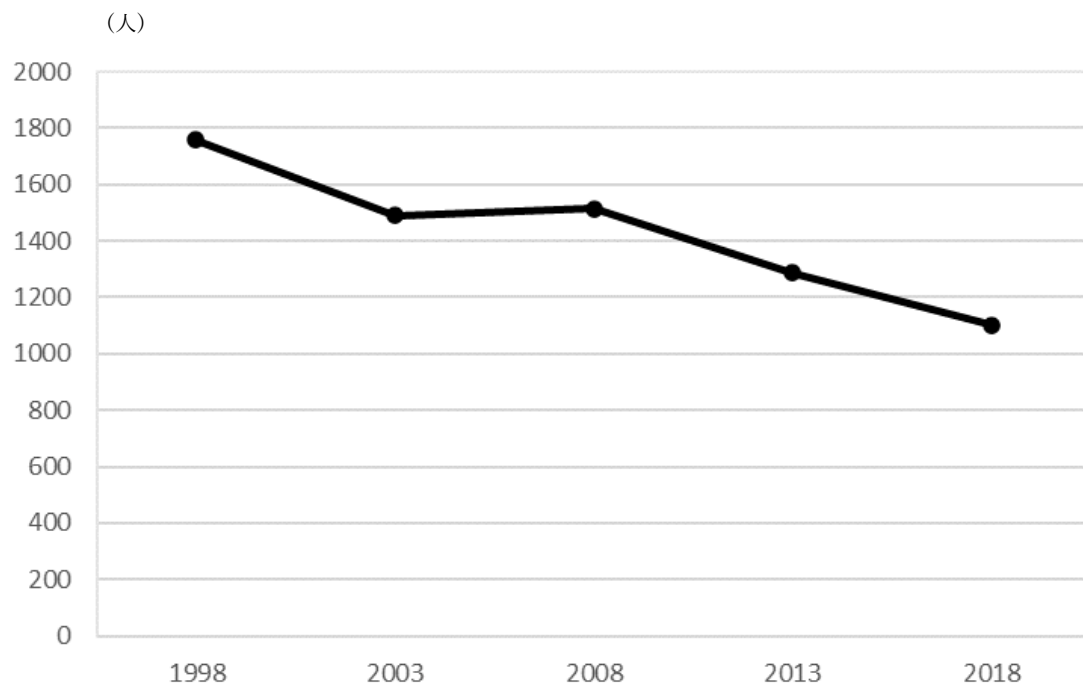


図7 鳥取県漁業従事者数の推移
(漁業センサスより作成)

表3 鳥取県市区町村別漁獲量 (2018年)

市区町村	漁獲量(t)	割合(%)
境港市	74,112	89.20
岩美町	4,820	5.80
鳥取市	2,117	2.50
大山町	885	1.10
その他	1,169	1.40
合計	83103	100

(海面漁業生産統計調査より作成)

2) 魚種別の漁獲量・漁獲金額

ここでは鳥取県で主に漁獲されている魚種について見ていく。表1をみると漁獲量の上位は1位のいわし類から5位のあじ類まで全て小・中型回遊魚が占めており、その割合は合計で約80%となっている。その後、まぐろ類、かに類、いか類と続いているが、これらは

すべて全体の5%以下である。小・中型回遊魚の漁獲量が多いのは、まき網漁によって効率的な漁獲が行われているからである。

表2は産出額の上位8品目を示したもののだが、これはかに類(16.5%)が2位のぶり類(10.5%)に差をつけて1位となっている。漁獲量で全体の80%を占めていた中・小型回遊魚(いわし類・さば類・かつお・ぶり類・あじ類)については、産出額では合計で43.5%となっている。鳥取県の主な魚種は安価で大量漁獲が可能な小・中型回遊魚と、高価だが漁獲量が限られているかに類・まぐろ類・いか類の2つのグループに大別できるといえる。

3) 漁獲量・漁獲金額の年次推移

次に鳥取県の漁業の年次推移を検討する。図3をみると鳥取県の漁獲量は2010年から2013年までの間徐々に減少していたが、2013年からは増加傾向にあり、2019年時点で80000tを超えている。また、図4は鳥取県の漁業産出額推移を示したもので、これも漁獲量の増加に伴って2013年から増加傾向にあり、2019年時点で200億円を超えている。

次に、魚種別の漁獲量、産出額の内訳をみていく。図5をみると2013年から2019年までに増加した漁獲量のほとんどはさば類といわし類の急激な増加分であり、その他の品目の漁獲量はほぼ横ばいや減少傾向にあるということが分かる。また、図6をみると、資源減少が問題視されているかに類の産出額が2010年から2018年にかけて大きく増加していることや、さば類、いわし類の漁獲量の急増が産出額の推移に大きく影響していることが分かる。図5から分かる通り、かに類の漁獲量は2010年から横ばいであるため、かに類の産出額増加は単価が高騰している影響だといえる。

近年の鳥取県の漁業は、いわし類、さば類の漁獲量急増とかに類の単価高騰が起きているという特徴がみられる。かに類の単価高騰には限界があるが、いわし類、さば類については、水産庁の「令和3年度魚種別資源評価」によると近年資源量が回復しつつあるとされており、今後も漁獲量増加が期待される。かに類・まぐろ類・ぶり類など単価の高い魚種の漁獲量が低迷している現状では、いわし類、さば類の漁獲量増加と資源管理の両立が重要になってくるのではないだろうか。また、単価の高い魚種もさらなる資源管理が重要となると考えられる。

県の漁獲量、産出額がともに増加傾向にある一方で、県内の漁業従事者は減少し続けているという問題がある。図7は鳥取県の漁業従事者数の推移を示したもののだが、これをみると鳥取県の漁業従事者数は1998年から2018年にかけて減少傾向にあり、20年間で600人以上減少していることが分かる。漁獲量、産出額が増加しても、漁師が減少しては将来的な漁業の発展は見込めない。鳥取県は県外漁船による漁獲も多いが、県内の漁業従事者数を維持、増加させることも重要だろう。

4) 市町村別の漁獲量

表 3 は鳥取県の漁獲量を市町村別に分けたものだが、これをみると県漁獲量の 89.2%が境港市に集中しており、境港市が県漁業の中心的役割を担っていることが良く分かる。そのため、次章からは境港に焦点を絞って鳥取県漁業の特色と実態を考察したい。

3. 境港の漁業

1) 境港の概要

境港市は鳥取県の北西、弓ヶ浜半島の北端に位置している。漁港は境港市の北端に位置しており、島根県との境界を通る境水道には、筆者が現地調査に訪れた際も多数の漁船が停泊していた。聞き取り調査によれば、境漁港の立地には、①近くに良い好漁場があること。境漁港の近くの島根半島から隠岐諸島までなだらかな地形が続いた後、一気に深くなっていることで、潮目ができやすく、魚が集まりやすい。②島根半島が防波堤となり、天然の良港となっていること。③漁港の周辺に水産加工場が整備されていること、④片側 2 車線の国道 431 号線が米子自動車道へ通じるなど交通の便利がよいことといった 4 つの要因があるという。また、境港は 1953 年に第 3 種漁港に指定され、その後 1973 年には特定第三種漁港へ昇格されたことで、船籍地に関係なく、全国の漁船が利用できるようになり、日本海の漁業基地として、他県の船籍の漁船も多く利用するようになっている。

2) 他県の漁船の影響

ここでは他県漁船が鳥取県漁業に与える影響について考察していく。そのためにまずは境港の主要漁法について確認する。図 8 は境港に入港する漁船の漁法別取扱量の割合を示したものだが、これを見ると最も取扱量が多いのはまき網漁で、その割合は全体の 85%にも及んでいるということが分かる。また、図 9 は境港に入港する漁船の漁法別取扱金額を示したものだが、こちらもまき網が最も大きな割合を占めており全体の 52%となっている。

まき網漁というのは、網船・探索兼灯船・運搬船・伝馬船で船団を組み、魚群を灯火で誘引した後、巨大な網で取り囲んで漁獲する漁法である。この漁法は様々な種類の魚を大量に漁獲できる一方で、魚が傷つきやすいという特徴がある。境港では取扱量、取扱金額のどちらの面からもみても、まき網漁が主要漁法となっている。

このことを念頭に、次は表 4 の大中型まき網と中型まき網の統数（船団数）に注目してほしい。先に述べた通り、まき網漁は境港の取扱量の 85%、取扱金額の 52%を占める主要漁法なのだが、大中型まき網は鳥取県 3 統、島根県 1 統、その他県 5 統、中型まき網は島根県 8 統となっている。まき網漁船団合計 17 統のうち 14 統は他県船籍であり、特に島根県からは大中型、中型あわせて 9 統のまき網船団が入港している。このことから、鳥取県の漁業において、島根県をはじめとした他県漁船の影響は大きく、境港は山陰沖で水揚げされた水産物の水揚げ基地として機能しているということが考えられる。

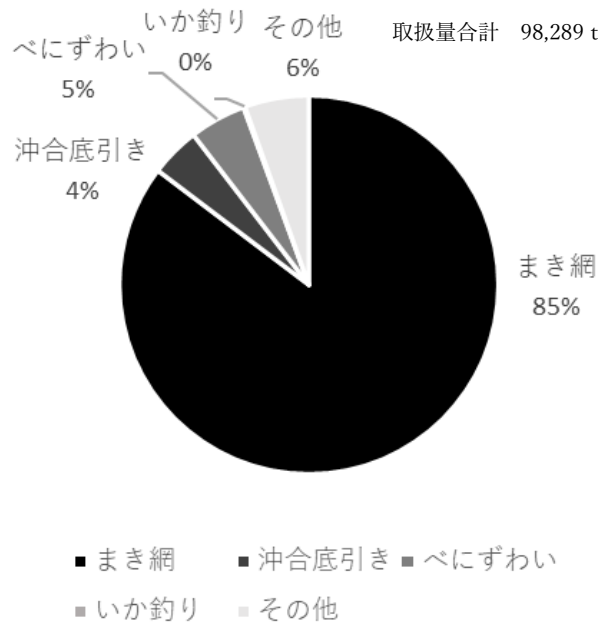


図8 境港へ入港する漁船の漁法別取扱量の割合（2020年）
（『さかいみなと令和二年度版』 境港水産事務所 より作成）

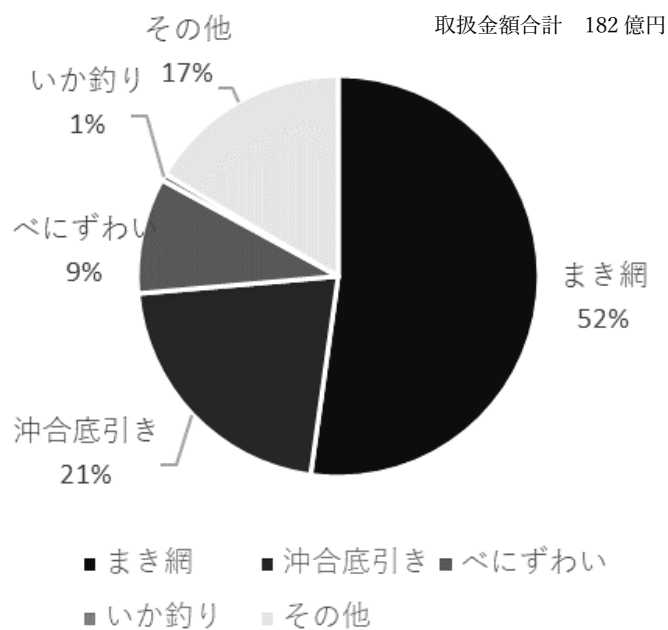


図9 境港へ入港する漁船の漁法別取扱金額の割合（2020年）
（『さかいみなと令和二年度版』 境港水産事務所 より作成）

表4 境港の主な漁業種類別利用漁船隻数 (2021年2月)

	鳥取県	島根県	その他県
大中型まき網	3統	1統	5統
中型まき網	0統	8統	0統
沖合底引き網(1艘曳)	19隻	1隻	0隻
沖合底引き網(2艘曳)	0統	2統	0統
べにずわいがに漁業	3隻	6隻	2隻
	鳥取県	鳥取県外	
中型いか釣り	2隻	16隻	
小型いか釣り	15隻	127隻	

(『さかいみなど 令和二年度版』境港水産事務所 より作成)

※中型いか釣り、小型いか釣りの鳥取県外は、島根県とその他県を合わせた数値

表5 境漁港での主要魚種出荷量上位4品目の利用 (2018年) (単位 t)

品 目	計 (出荷量)	生鮮食 用向け	缶詰向け	その他の 食用加工 品向け	養殖用又 は漁業用 餌料向け
さば類	46775	1871	-	3742	41162
まいわし	17426	42	1475	334	15575
まあじ	16389	140	-	1919	14330
ぶり類	11259	1125	-	10134	-
その他	1323	1275	-	48	-
計	93172	4453	1475	16177	71067

(『水産物流通統計』所収「漁港別主要品目別用途別出荷量」より作成)

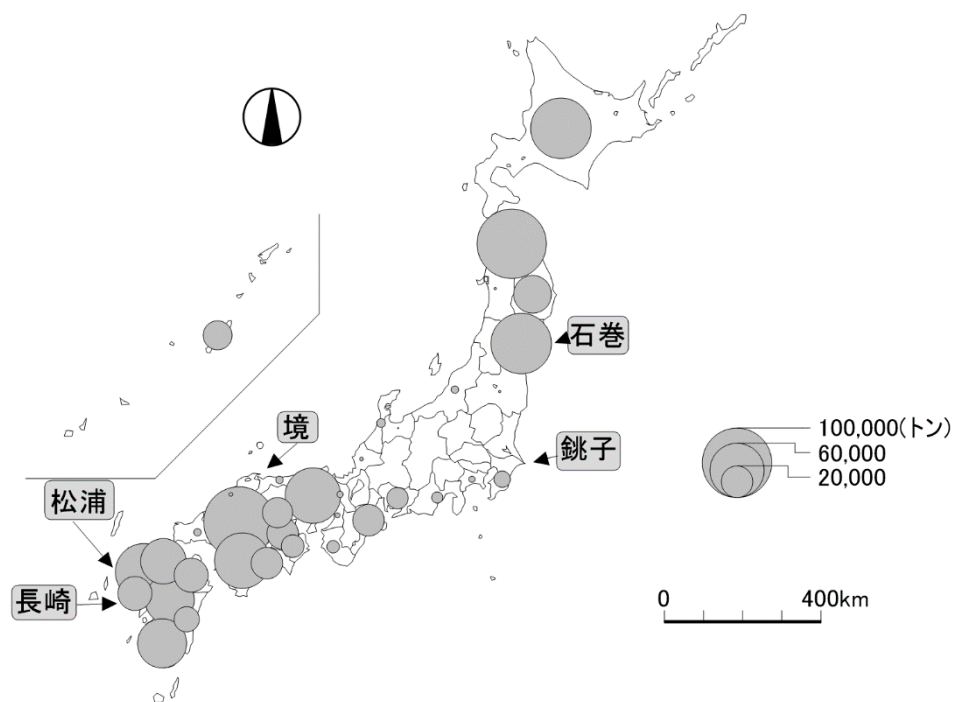


図 10 都道府県別養殖魚収穫量（2019 年）
（海面漁業生産統計調査より作成）

表 6 漁港別漁業用又は養殖用餌料向け出荷量（2018 年）

漁港	出荷量(t)	割合(%)
銚子	93384	30.8
境	71067	23.4
松浦	45719	15.1
石巻	31568	10.4
長崎	23607	7.8
女川	8167	2.7
浜田	7735	2.5
枕崎	7277	2.4
唐津	4559	1.5
舞鶴	2914	1.0
その他	7373	2.4
合計	303370	100.0

（『水産物流通統計』所収「漁港別主要品目別用途別出荷量」より作成）

3) 水産物の利用

表 5 は 2018 年の境港の主要魚種 8 品目のうち、出荷量の上位 4 品目を抜粋したものである。主要魚種 8 品目は水産物流通統計において境港の主要魚種とされている魚種のことを指し、かに類などは含まれていないことに注意する必要がある。表 5 ではまいわしの 89%、まあじの 87%、さば類の 88% が食用にならず、養殖用又は漁業用餌料向けとして出荷されていることが目に付く。境港といえば、かに類・まぐろ類をはじめとした鮮魚の直売や多数の水産加工場が有名だが、実は漁や養殖に使う餌の生産も盛んであるという特徴があることが分かった。聞き取り調査によると、これはまき網による大量漁獲によって、食用利用が難しい小サイズの魚がとれてしまうことに加えて、境港は美保湾にある銀鮭の養殖場との距離が比較的近く、養殖用餌料向けには地理的優位性があるということが関係しているという。

図 10 は全国の養殖魚の収穫量を示した地図である。これをみると日本で養殖が盛んにおこなわれているのは北海道、東北地方太平洋側（特に青森県、岩手県、宮城県）、瀬戸内海沿岸地域（特に広島県、兵庫県、愛媛県）、九州地方（特に福岡県、佐賀県、熊本県、鹿児島県）の 4 か所であることが分かる。一方、調査対象である鳥取県の養殖魚収穫量は 1335t と非常に少ない。

次に、表 6 を見ると、漁業用又は養殖用餌料向け出荷量は、銚子（千葉県）93384t、境（鳥取県）71067t、松浦（長崎県）45719t、石巻（宮城県）31568t、長崎（長崎県）23607t と上位 5 港の出荷量が非常に多くなっており、この 5 港だけで全体の 87.5% を占めていることが分かる。漁業・養殖用の餌料の出荷は特定の漁港に偏っており、それらの漁港は銚子港を除いて、全て養殖の盛んな地域に近いといえる。今回の調査対象である境港は石巻、長崎、松浦に比べると養殖地域との距離が離れているようにみえるが、米子自動車道を通れば瀬戸内海沿岸地域の養殖場まで 4 時間程度でアクセスできる。2019 年の海面漁業統計調査によると、瀬戸内海沿岸地域では生餌だけでも年間約 42000t の餌が養殖に使用されているが、表 6 で示した通り瀬戸内海沿岸地域には大規模に養殖用餌料を出荷している漁港が存在しないため、他地域から多くの餌料を仕入れていると考えられる。そう考えれば、大規模に餌料を出荷している漁港の中で最も瀬戸内海沿岸地域に近い境港には地理的優位性があるといえるだろう。また、近年美保湾で銀鮭の養殖が始まり、地元でも養殖用向けの餌料の需要が高まってきていることも重要であると考えられる。

4. 境港の水産加工業

1) 境港の水産加工業の状況

ここでは境港市の水産加工業についてみていく。表 7 は 2019 年の境港市の工業出荷額の内訳を示したものである。これをみると水産加工食品の出荷額は 480 億円で、工業出荷額全体の 54.9% を占めていることが分かる。境港市の工業出荷額の半分以上は水産加工品となっており、市の中心産業が水産加工業であることは間違いない。また、図 11 をみると境港

市の水産加工食品出荷額と工業出荷額に対する水産加工食品出荷額の割合は 1999 年から 2009 年までの期間、2007 年に増加したことを除けば減少傾向にあったが、2010 年からは増加傾向に転じていることが分かる。2010 年から 2018 年にかけての 8 年間で水産加工食品の出荷額は約 180 億円増加、工業出荷額に対する水産加工食品出荷額の割合も約 8% 上昇しており、境港市では近年、水産加工食品の生産が盛んになっていることが分かる。

表 7 境港市の産業別の工業出荷額（2019 年）

産業別	事業所数	従事者数	出荷額(億円)
水産加工食品	33	1546	480
その他の食品	16	783	150
飲料・飼料等	4	118	25
金属	7	89	12
その他	17	745	X
合計	77	3281	875

（『境港の水産 令和 2 年版』境港市より作成）

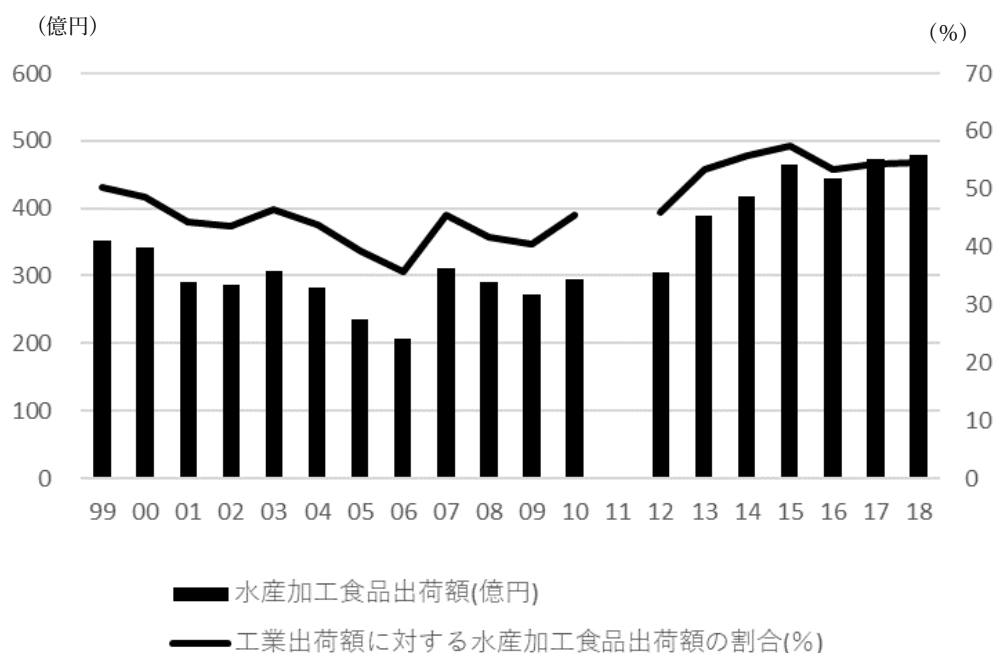


図 11 境港市水産加工食品出荷額の推移

（『境港の水産 令和 2 年版』境港市より作成）

※2011 年はデータなし

2) 水産加工団地の形成

境港市で水産加工業が発達した背景には、大規模な水産加工団地の形成がある。『新修境港市史 本文編』によると、水産加工団地の形成は1969年に始まるが、その前から境港市には複数の水産加工場が存在していた。しかし、その当時は市内の加工業者は市街地に散在しており、工場拡張の余地がなく、規模の適正化、機械設備の導入を妨げていた。また、廃棄物、汚水による公害が生じていた。そこで、境港市は1969年から港湾の整備、水産加工業者の集中化、汚水処理場の建設を進め、徐々に水産加工団地を形成していった。その結果誕生したのが、昭和地区工業団地である。図12の北東部、県営卸売市場（星印）付近の事業所が集中している地域が昭和地区工業団地で、図12に示した水産加工場46か所のうち23か所、50%がこの地域に集まっている。また、昭和地区工業団地の南にある海につき出た地域、竹内工業団地にも14か所、30.4%の水産加工場が集まっており、昭和地区工業団地に次ぐ規模となっている。



図12 境港市の水産加工事業所の分布（2021年）

(i タウンページ、グーグルマップより作成)

昭和地区工業団地の地理的優位性は原料と製品の輸送が迅速に行えるという点にある。まず、原料の輸送に関しては原料の水産物が水揚げされる県営卸売市場が隣接していることで、加工場までの輸送距離が短くなっているという利点がある。水揚げから加工場までの輸送時間を短縮することで鮮度を維持したまま加工を行えるようになっている。

また、水産加工品の輸送に関しては団地の西側を通る国道 431 号線が大きな役割を果たしている。この国道 431 号線は、境港から南に進んでいくと米子自動車道、その先の中国自動車道に繋がっており、大阪まで約 4 時間で到達することが可能になっている。人口の少ない山陰地方は市場が小さいため、関西圏の大市場まで迅速に製品を輸送できることは非常に大きな利点である。水産加工団地の形成が水揚げ、加工、出荷の一連の流れをスムーズにしたことで、境港市の水産加工業は大きな発展を遂げることが出来たのである。

5. おわりに

本稿では、鳥取県の漁業、特にその中心である境港に焦点を絞って調査を行った。今回の調査で、鳥取県はかに類をはじめとした高価な魚種が漁業産出額上位を占めているが、近年はいわし類、さば類などの小型魚種の漁獲量、産出額も増えてきていることが分かった。また、県の漁業産出額は高いが県内の漁業従事者は減少し続けているということも分かった。

境港については、隣県の島根県を中心に多くの他県漁船が入港し、水揚げをおこなっていること、水揚げされた水産物を迅速に加工する工業団地が整備されていること、水揚げされた水産物は漁業用・養殖用餌料としても多く出荷され、境港が日本の漁業・養殖業において大きな役割を果たしていることが分かった。

本稿の目的は鳥取県で水産業が盛んに行われている要因を考察することであったが、その要因は主に山陰沖に好漁場があり、かに類やまぐろ類などの高価な魚種が豊富にとれること、県内の漁業従事者は少ないものの他県から多くの漁船を受け入れていること、水揚げした水産物を迅速に加工、出荷する設備が整っていることの 3 点にあると思われる。鳥取県は境港を中心に山陰地方の水産基地としての役割を果たしているといえる。

また、本稿のはじめに、近年水産物の国内市場が縮小していると述べたが、水産庁の調べによれば、水産加工食品の消費量に関しては下げ止まりの傾向がみられ、生鮮・冷凍魚ほど市場規模は縮小していないようである。そのため、今後の水産業では水産加工食品の製造が重要になってくることが予想される。また、近年は日本近海の水産資源が減少しており、養殖による水産物の生産も重視されるようになっている。水産資源の適切な管理とともに、水産資源の加工と養殖といった、現在の日本漁業に必要な二つの要素を抑えることが、今後の鳥取県で漁業の発展を考える上で重要であると考えられる。

付記

本稿を作成するにあたり、鳥取県農林水産部水産振興局水産課水産振興室長の宮永様、鳥取県境港水産事務所境港水産振興担当の上原様、鳥取県漁業協同組合の小倉様にはお忙しい中にもかかわらず大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考

- ・農林水産省 海面漁業生産統計調査（最終閲覧日 2021年12月15日）
https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/kaimen_gyosei/index.html
- ・農林水産省 漁業センサス（最終閲覧日 2021年12月15日）
<https://www.maff.go.jp/j/tokei/census/fc/>
- ・水産庁 水産物消費の状況（最終閲覧日 2021年12月23日）
https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h29_h/trend/1/t1_2_4_2.html
- ・水産庁 令和3年度魚種別資源評価（最終閲覧日 2022年2月7日）
<http://abchan.fra.go.jp/digests2021/index.html>
- ・鳥取県ホームページ 農林水産部 さかいみなど漁港・市場活性化ビジョン「境港の現状」（最終閲覧日 2021年11月20日）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/826774/vision-2genjyou.pdf>
- ・鳥取県ホームページ 農林水産部 資源管理（最終閲覧日 2021年11月20日）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/294721.htm>
- ・境港水産事務所 2021『さかいみなど 令和二年度版』、境港水産事務所
- ・境港市 2021 『境港の水産 令和2年版』、境港市
- ・境港市 1997 『新修境港市史 本文編』、境港市